

歴史人物を描いた文学作品 1

はじめに

「歴史人物を描いた文学作品」の第1回目は、有史以来平安時代までの歴史人物 40 人を描いた文学作品を紹介します。日本武尊から源為朝まで、作家の目を通した歴史人物を歴史小説という形で再認識していただければと思います。

なお、ここで紹介しました歴史小説は、資料リストも含めその人物を描いた全作品を紹介している訳ではなく、当館で選択させていただいた作品です。

[資料リスト](#)

1. 日本武尊（やまとたけるのみこと） 「日本書紀」「古事記」の伝承上の王族将軍

景行天皇の皇子です。有史以来5・6世紀に至る大和朝廷の、勢力の全土拡大という歴史を踏まえて、これを象徴する伝説上の英雄です。黒岩重吾著が『白鳥の王子ヤマトタケル』1～6という戯曲を執筆しています。

2. 神功皇后（じんぐうこうごう） 「日本書紀」「古事記」などの伝承上の皇后

仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）の皇后。天皇の没後新羅を征服し、帰還後九州で応神天皇を生んだとされます。なお、仲哀天皇は14代天皇で日本武尊の子と伝わります。黒岩重吾が『女龍王神功皇后』上・下を執筆しています。

3. 雄略天皇（ゆうりゃくてんのう） 「日本書紀」「古事記」系譜上の5世紀後半の天皇

第21代の天皇で、中国側の諸史料に見えるいわゆる倭の五王の最後の武王が雄略天皇とされます。この雄略天皇の時代に大和政権の勢力は、関東から九州に及んでいたと推測されます。黒岩重吾が『ワカタケル大王』執筆しています。

4. 卑弥呼（ひみこ・ひめこ） 2世紀末から3世紀前半の邪馬台国の女王

2世紀後半に倭国で大乱があり、180年代頃卑弥呼は王となりました。魏の景初3年(239)6月卑弥呼は魏帝に朝貢し、同年12月魏帝は詔書を発して卑弥呼に「親魏倭王」の称を与えています。魏の正始8年(247)頃卑弥呼は狗奴国と対立のさなか亡くなったようです。卑弥呼については邦光史郎の『まぼろしの女王卑弥呼』上・下などの作品があります。

5. 崇峻天皇（すしゅんてんのう）？～592年 在位 587-592年

欽明天皇の皇子です。587年用明天皇の崩御後蘇我馬子と物部守屋が戦端を開くと、馬子に加担し物部氏滅亡後即位しました。しかし即位後も馬子が大臣として政治の実権を握ったため馬子と対立し、592年馬子の手先に暗殺されました。豊田有恒が『崇峻天皇暗殺事件』を執筆しています。

6. 推古天皇（すいこてんのう） 554～628年 在位 592～628年

欽明天皇の皇女。崇峻天皇の異母姉。576年異母兄敏達天皇の皇后になりました。585年敏達天皇、587年用明天皇が没して崇峻天皇が即位しますが、592年に崇峻天皇が暗殺され、叔父蘇我馬子らに推されて女性として初めて即位しました。在位36年の間に数次に渡り遣隋使

を派遣して中国交渉を積極的に行ったほか、冠位十二階・憲法十七条の制定など政治の刷新がなされました。また、推古朝は法隆寺に象徴される飛鳥文化の最盛期にあたります。推古天皇については、黒岩重吾の『紅蓮の女王』などの作品があります。

7. 聖徳太子 574～622年

推古朝の摂政。用明天皇の皇子です。587年の蘇我氏と物部氏の戦いでは蘇我氏に与し、592年女帝推古天皇が即位すると、太子は皇太子・摂政になりました。太子は仏教を国の宗教とし、仏教を広めるため法隆寺などを建立しました。また、冠位十二階を定め、憲法十七条を發布するなど天皇を中心とした中央集権の国家を目指しました。聖徳太子については平岩弓枝の『聖徳太子の密使』などの作品があります。

8. 蘇我馬子（そがのうまこ）？～626年

6～7世紀の豪族で、敏達朝から用明・崇峻・推古朝までの大臣です。この時期の朝廷政治に極めて大きな影響力をもちました。奈良県明日香村の石舞台古墳は馬子の墓といわれています。馬子については、黒岩重吾が『磐舟の光芒』上・下を執筆しています。

9. 天智天皇（てんじ（ぢ）てんのう） 626～671年 即位 668～671年

中臣鎌足と中大兄皇子（後の天智天皇）は、当時の権力者である蘇我蝦夷・入鹿を倒し孝徳天皇たてると、646年から大化の改新を断行しました。孝徳天皇のあとを継いだ齊明天皇（皇極天皇の重祚）の時代は、蝦夷遠征などで政情は安定しませんでした。一方、朝鮮半島では百済を支援した日本は663年白村江の戦いで唐・新羅軍に敗れ、朝鮮半島での日本の地位はなくなりました。こうした中で即位した天智天皇は近江令や庚午年籍をつくり内政に力を入れました。天皇の死後皇位を巡って内乱（壬申の乱）が起こっています。天智天皇については、杉本苑子の『天智帝をめぐる七人』などの作品があります。

10. 額田王（ぬかたのおおきみ） 生没年不詳

『万葉集』初期の代表的な歌人で、天智天皇の妃になりました。白鳳時代には百済から日本に王族・貴族が渡って来たこともあり、宮廷で漢詩文が盛んになりました。その影響で和歌として五・七調の長歌や短歌が発達しました。額田王や柿本人麻呂らは白鳳時代の宮廷のみずみずしく力強い有様を詠っています。井上靖『額田女王』などの作品があります。

11. 持統天皇（じとうてんのう） 645～702年 在位 686～697年

白鳳時代の女帝で、天智天皇の第二皇女です。673年天武天皇が即位すると皇后になりました。686年天武天皇が亡くなると皇太子の草壁皇子と政務を執り、689年草壁皇子が亡くなると、自ら律令制度の完成に尽力しました。694年藤原京に遷都し、のち草壁皇子の子の軽皇子（文武天皇）に皇位を譲り、大宝元年(701)8月には「大宝律令」が完成しました。三田誠広が『炎の女帝持統天皇』を執筆しています。

12. 大津皇子（おおつのおうじ） 663～686年

飛鳥時代の皇族で天武天皇の第三皇子です。天武朝では皇太子草壁皇子に次ぐ地位にありました。686年天武天皇が崩御すると、草壁皇子と対立し謀反を疑われて捕えられ刑死しました。黒岩重吾の『天翔る白日』などがあります。

13. 藤原不比等（ふじわらのふひと） 659(658)～養老4年(720)

奈良時代の官僚。鎌足の第二子で持統天皇以後歴代の信任が厚く皇室と密接な関係を築きました。4人の男子も藤原南家・北家・式家・京家の祖になって政界で活躍しました。黒岩重吾が『天風の彩王』上・下を執筆しています。

14. 役小角（えんのおづの（おずぬ）） 7世紀後半～8世紀初期頃

大和の葛城（木）山にいた呪術師です。弟子の韓国連広足がのちに小角の能力を非難・讒言して、699年伊豆へ遠島に処せられています。谷恒生『役小角 冥府魔道』などの作品があります。

15. 長屋王（ながやおう） 684～天平元年(729)

天武天皇の孫、奈良時代の大官。王のもとで養老6年(722)に百万町歩の開墾計画を立てられ、翌年三世一身法が施行されました。また、藤原不比等は王に好意を寄せながら自家の栄進をはかります。皇族勢力を代表する長屋王は、不比等の死後勢力を伸ばす藤原氏を抑えようとしますが、策謀で自殺させられました。杉本苑子著『穢土荘厳』上・下などがあります。

16. 鑑真（がんじん） 688(689)～天平宝宇7年(763)

唐の高僧で日本律宗の開祖です。唐の時代に中国の揚州江陽県で生まれました。聖武天皇の招きに応じ5度の渡航の失敗にも屈せず天平勝宝5年(753)来日しました。律に生き伝法に殉じた非凡な人物であったため、聖武・光明天皇の深い信頼を得ました。鑑真については井上靖が『天平の薨』を執筆しています。

17. 元正天皇（げんしょうてんのう） 680～天平20年(748)、在位715～724年

奈良時代の女帝。草壁皇子の皇女。母は元明天皇。霊亀元年(715)皇太子の首皇子（聖武天皇）が幼年のため元明天皇より譲位され即位しました。神亀元年(724)皇太子の首皇子に譲位しました。治世の前半は藤原不比等が、不比等没後は長屋王が政治において重きをなしました。また、在位中に「養老律令」「日本書紀」が完成しています。永井路子が『美貌の女帝』で元正天皇を描いています。

18. 道鏡（どうきょう） ?～宝亀3年(772)

奈良時代の政治家・僧侶。河内国弓削郷の豪族弓削氏の出身。孝謙上皇の病を治療して、孝謙上皇が称徳天皇として再位した時代に法王となり仏教政治を行いました。のち道教を皇位に就けようとする動きがありましたが、天智天皇の孫の光仁天皇が即位すると下野国に追放されました。道教については黒岩重吾著『弓削道鏡』ほかの作品があります。

19. 桓武天皇（かんむてんのう） 天平9年(737)～延暦25年(806) 在位781～806年

桓武天皇は新たな政治基盤を確立するため、寺院勢力の強い平城京から延暦3年(784)に長岡京へ、次いで延暦13年(794)に平安京へ遷都しました。天皇は律令制を再編・強化するため新たな政治を積極的に進めました。また、国司の役所を守るため建児という地方軍事力を整備しています。三田誠広が『桓武天皇 平安の霸王』という作品を執筆しています。

20. 空海（くうかい） 宝亀5年(774)～承和2年(835)

平安前期の僧で、真言宗の開祖です。諡号は弘法大師。讃岐（善通寺市）に生まれ、南都（奈良）で学んだのち延暦23年(804)には唐に渡って真言宗を学びました。帰国後嵯峨天皇に願い出て高野山に金剛峯寺を建て、京都では教王護国寺（東寺）を賜って真言密教の道場としました。司馬遼太郎が『空海の風景』上・下を執筆しています。

21. 最澄（さいちょう） 天平神護2(766)～弘仁13年(822)

平安前期の僧で天台宗の開祖です。近江国滋賀郡に生まれ、南都（奈良）で学んだのち延暦23年(804)に唐へ渡海し天台宗を学びました。帰国後桓武天皇の庇護を受け、延暦寺を立てます。最澄については永井路子の『雲と風と』という作品があります。

22. 橘嘉智子（たちばなのかちこ） 延暦5年(786)～嘉祥3年(850)

嵯峨天皇の皇后で檀林皇后と称されます。子の仁明天皇の即位後太皇太后になります。仏教への信仰が篤く、檀林寺を承和年間（834～847）に創建しました。但し、寺は皇后の死後急速に衰えたといえます。杉本苑子が『檀林皇后私譜』上・下を執筆しています。

23. 在原業平（ありは(わ)らのなりひら） 天長2年(825)～元慶4年(880)

平安初期の歌人。六歌仙・三十六歌仙の1人。平城天皇の皇子阿保親王の子。情熱的で真情あふれる歌を詠みました。在原業平については三田誠広が『なりひらの恋』を執筆しています。

24. 小野小町（おののこまち） 生没年不詳

平安前期（仁明・文徳・清和天皇の頃）の歌人。六歌仙・三十六歌仙の1人。出羽国の郡司良真の女といわれる。歌は恋歌が多く、王朝女流文学の先駆的役割を果たしています。吉行淳之介が『小野小町』執筆しています。

25. 二条后・藤原高子（にじょうのきさき ふじわらのこうし(タカキコ)） 承和9年(842)～延喜10年(910)

清和天皇女御、陽成天皇の母。入内以前に在原業平との悲恋物語が伝わっています。杉本苑子が『二条ノ后』を執筆しています。

26. 菅原道真（すがわらのみちざね） 承和12年(845)～延喜3(903)

平安前期の学者・政治家です。その詩文は『菅家文章』『菅家後集』として伝わり、歴史家としても『三代実録』の選修にあたりました。道真は文人学者として類まれな人でした。赤江爆が『巨門星 天の部』を執筆しています。

27. 平将門（たいらのまさかど） ?～天慶3年(940)

平安中期の武者。桓武平氏高望王の孫。高望王は上総国司として関東に下るとその子や一族らは土着して地域の支配者になりました。将門もその一人で、承平年間(931～937)同族や他氏と私領をめぐって争いを起こし、さらに土地や租税を巡って国司・郡司と対立すると、国司と対立していた豪族と手を結び天慶2年(939)国府に対し反乱を起こしました（将門の乱）。新皇と称し東国の自立をはかりましたが、天慶3年(940)平貞盛らによって討たれました。平将門は大岡昇平が『将門記』などで描いています。

28. 藤原純友（ふじわらのすみとも） ?～天慶4年(941)

平安中期の地方官人。純友は伊予の掾（国司）として赴任し、南海道・山陽道の海賊を討つよう命令を受けました。しかし、海賊の首領となって天慶2年(939)、の将門の反乱とほぼ同時期に瀬戸内海で反乱を起こしました。伊予の日振島を拠点に瀬戸内海を率いて各地で放火・略奪を行い、ついには大宰府を攻め落としました（純友の乱）。海音寺潮五郎が『海と風と虹と』上・下で純友を描いています。

29. 空也（くうや） 延喜3年(903)～天禄3年(972)

平安中期の僧。日本浄土教の先駆者で、庶民の間に念仏を広めた功績が大了、民を救うため自ら事業を行うと共に、常に阿弥陀仏の名号を唱え、市中を遊行して人々に念仏を勧め、阿弥陀聖・市聖として尊敬されました。山田太一が『空也上人がいた』を執筆しています。

30. 藤原道長（ふじわらのみちなが） 康保3年(966)～万寿4年(1027)

平安中期の公卿・摂政・太政大臣です。道長の女子は天皇または東宮の妻として、3代の天皇（後一条天皇・後朱雀天皇・後冷泉天皇）の母として、道長の外戚としての地位を確立させ

ています。道長は晩年「この世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」と詠みました。永井路子が『この世をば』上・下で道長を描いています。

31. 和泉式部（いずみ しきぶ） 生没年不詳

平安中期の女流歌人。和泉守橘道貞と結婚。冷泉天皇の皇子である為尊親王・敦道親王と恋愛し道貞と別離しました。紫式部とも交わり、その後、藤原道長の家司藤原保昌と再婚し、その任国丹後に下りました。大原富江が『わたしの和泉式部』で和泉式部を描いています。

32. 紫式部（むらさき しきぶ） 天元元年(978)～?

平安中期の女流文学者。藤原為時の娘。家は代々学者の家系。長徳 2 年(996)父の越前守任官に伴い任地に同行。長保元年(999)藤原宣孝と結婚。夫の死後文学に傾倒し「源氏物語」の創作に着手。文才を藤原道長に認められ道長の娘中宮彰子の女房になりました。紫式部を描いた作品は杉本苑子の『散華』上・下などがあります。

33. 源義家（みなもとのよしいえ） 長暦 3 年(1039)～嘉承元年(1106)

平安後期の武将。石清水八幡宮で元服したので八幡太郎と号しました。天喜 4 年(1056)父頼義とともに陸奥に従軍し安倍頼時・貞任親子と戦いました。康平 5 年(1062)厨川柵を囲んで貞任を討滅（前九年の役）しています。永保 3 年(1083)陸奥守兼鎮守府将軍として赴任し、奥羽に源氏の支配権を確立するため出羽の清原氏の内紛に干渉し、清衡と組んで家衡・武衡を攻め（後三年の役）、寛治元年(1087)に勝利しました。しかし、この戦闘は朝廷から私闘とみなされました。谷恒生が『八幡太郎義家』を執筆しています。

34. 奥州藤原氏

奥州では源義家に協力した奥州藤原氏が勢力を得て、清衡(?～1128)・基衡(生没年不詳)・秀衡(?～1187)の 3 代に渡って平泉を中心に栄えました。奥州産の金の経済力をもって陸奥・出羽両国に大勢力を築きました。その中心地である平泉に建てられたのが中尊寺です。しかし、源頼朝が東国の支配を確立させると圧迫を受け、源義経をかくまったこともあり、文治 5 年(1189)に鎌倉の大軍によって滅ぼされました。奥州藤原氏については、高橋克彦が『炎立つ』1～4 を執筆しています。

35. 待賢門院・藤原璋子（たいけんもんいん ふじわらのたまこ） 康和 3 年(1101)～久安元年(1145)

鳥羽天皇の皇后で権大納言藤原公実の子です。崇徳天皇と後白河天皇を生みました。天治元年(1124)院号宣下で待賢門院と称しました。渡辺淳一が『天上紅蓮』を執筆しています。

36. 祇園女御（ぎおんのにょうご） 生没年不詳

平安後期の女房です。中宮藤原賢子没後白河院の寵愛を受け、祇園に住んだため祇園女御と称しました。また、待賢門院璋子も女御の猶子です。祇園女御を描いた作品には瀬戸内晴美の『祇園女御』があります。

37. 西行（さいぎょう） 元永元年(1118)～建久元年(1190)

平安後期の歌人で家は代々衛府に仕える武家です。16 歳頃徳大寺家の隨身となり、のち鳥羽上皇に北面の武士として仕えました。保延 6 年(1140)に出家し仏法修行と和歌の道に精進しました。西行は仏教の世界観を基礎に、孤独・漂白の人生などを自分の生活体験に基づいて詠い、独自の抒情的歌風を確立しました。西行については瀬戸内寂聴の『白道』などがあります。

38. 俊寛（しゅんかん） 康治元年(1142)～治承3年(1179)

平安後期の真言宗の僧で、後白河院の近臣・法勝寺座主として権力を持ちました。治承元年(1177)鹿ヶ谷の俊寛の山荘で、藤原成親・師光らと平氏追討の謀議をしましたが多田行綱の密告で失敗し、平清盛によって鬼界島に流され同島で没しました。村松友視が『俊寛のテーマ』を執筆しています。

39. 平清盛（たいらのきよもり） 元永元年(1118)～養和元年(1181)

平安後期の武将。皇室や摂関家の内部対立である保元の乱(1156)では、後白河天皇方について崇徳上皇方を打ち破り、平治の乱(1159)では源義朝を倒して王朝国家の軍事力を一門で握りました。後白河上皇に仕えて清盛は太政大臣になり、一族も高位高官につきます。また、娘の徳子は高倉天皇の中宮になって安徳天皇を生みます。平氏打倒を図った治承元年(1177)の鹿ヶ谷の事件を切り抜け、治承3年(1179)には後白河法皇を幽閉し、多数の貴族の官職を奪うなどしましたが、かえって反平氏勢力は活発化しました。治承4年(1180)の源頼政が挙兵するなかで福原に遷都し、寿永の内乱期を前に養和元年(1181)亡くなりました。森村誠一や宮尾登美子などがそれぞれ『平家物語』を執筆しています。

40. 源為朝（みなもとのためとも） 保延5年(1139)～嘉応2年(1170)

平安後期の武将。父は源為義で源義朝の弟です。巨大な体躯と強弓で知られる伝説的な人物です。保元の乱の際、父に従い崇徳上皇方につき、敗れて逃走しました。但し、弓矢の技術を惜しまれ死を免ぜられて伊豆大島に流されます。のち近隣の諸島を従えましたが、狩野茂光の追討を受けて自殺しました。津本陽の『鎮西八郎為朝』などの作品があります。

【参考文献】

『コンサイス日本人名事典』第4版 三省堂 平成16年

『日本古代中世人名辞典』吉川弘文館 平成18年

『もういちど読む山川日本史』山川出版社 平成24年

